

---

# 聖なるラッパ

西美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖なるラッパ

### 【Zコード】

Z6433Z

### 【作者名】

西美

### 【あらすじ】

貧しい親子はひつそりと聖なる夜を祝おうとしていた。

「馳走もなくプレゼントすら用意できない母親は、せめてもと思い街に子供を連れて行く。そこで出合つた愉快なピエロ。

聖なる夜に街を恐怖に陥れたピエロ。

母親は我が子を救えるのか?そして結末は…。

古い古いドイツの片田舎にその親子はいた。

父親は早くに死に、母親は若かつたので深夜に身を売つて子を養つ。  
母親の名はエリーザ、そして5歳になる息子テオ。  
貧しいながらも一人はその街で必死に生きていた。

クリスマスの聖なる日が近づく毎に、テオが母親に無邪気に問う。  
「ねえお母さん、僕の家にもサンタさんは来るのかな?」

その度にエリーザは返事を濁す。

生活だけで精一杯。とてもお祝いなんて出来ない。

信心深いエリーザは現在の自分の境遇を思うと胸が苦しくなつた。  
けれどもテオは何も知らない。

ただ子供らしく素直に聖夜を楽しみにしている。

エリーザは考えた。

せめて家では、馳走もプレゼントも用意してやれないが  
街に連れ出して、少しでも祭り気分を楽しませてあげよう。  
その日は稼ぎ時だが仕方がない。

「良い子にはサンタがくるわね」

優しい母親の言葉にテオは元気に「うん……」と答えた。

その寒い日もエリーザに休みはない。

寒い街中に立つて自ら客を捕まえ生活の糧を得るために。  
夕方の時間にテオを連れ出し教会に向かつ。

教会では少しの寄付で一晩の子供の子守をしてくれる。  
それは寄付という名のコイン一枚でもいいのだ。

ほぼ毎日のように働くエリーザはテオをそこ連れて行くが日課になつてゐる。

その教会はとても小さく、テオと同じ境遇の子達や親のない子を慈善活動の一環として養っていた。

テオを預けコインを渡す。

そしてエリーザが次に向かうのは街外れの薄暗い路地にある娼婦専用の薬屋だ。

口コミで知ったここは、病気予防と避妊の薬に大変効果があった。出費は痛いが、背に腹は代えられない。

母親がいなくなれば、あの孤児達のように教会に引き取られるのだ。

重いドアが軋むように音をたて開く。

中は薄暗く物が散乱する狭い店。

エリーザは店主をみつけ、いつもの薬を頼む。

まだ若い店主は黒髪を背中まで伸ばした男。

顔立ちは整っているが、人を寄せ付けない陰鬱な雰囲気の男。まるで男の魔女みたいで、緑の濃いフードを深く被っている。男に薬の名を告げると無言で差し出される。

そしてお金を払い受け取った。

男は一言もしゃべらない、それがまた不気味だった。

買った赤い薬を飲み、そして寒い街中にて手を擦り合わせて唇を引く。

心を殺して、ただ息子を養うためにエリーザは必死で働く。

浮かぶのはテオの笑顔。

がんばって少しでも貯めてやらなこと。

そうそうクリスマスは休むのだから、いつもより頑張らないと。

ヘトヘトに疲れきった体で明け方に教会に向かう。

そして、まだ寝たままのテオをそつと抱き上げ

エリーザは唯一の幸せの温かさと重みに感謝するのだった。

聖なる夜は皆に平等に訪れる。

エリーザは久しぶりに親子一人で過ごす。

テオは興奮して、すぐにエリーザの手を振り解こうとする。街中は光りが沢山ともり、人々の熱気で包まれていた。たあいない木すら化粧を施され、道なりの家は飾り立てている。この日だけの特別な祭り。

それは日が暮れて夜になつてくると一層輝いた。

ただ街中を練り歩くだけ。

それだけなのにテオは大興奮だ。

小さな馬車が横を通り過ぎるだけで歓声をあげ

お母さんこつこつこつちと、エリーザの手を引っ張つては笑う。

ご馳走もプレゼントもないクリスマス。

けれどもテオにとつては最高に嬉しいのは母親と共にいられる事。

二人は教会に向かう。

せめてこの日は親子で祈ろうとやつて来た時には既に夜の闇が覆い、空から白い雪がチラつき始めていた。中に入り一人で祈る。

母は子のために。そして子は

「何を祈つたの？」

そう聞くとテオは

「お母さんが元気でいますようにって」と真つ直ぐにエリーザの目を見て言った。

二人で教会を出た所で何やら子供たちが集まっていた。

止める間もなくテオが好奇心一杯で走る。

急いで追いかけたエリーザが見たものは。

ピエロが愉快にラッパを吹いたパフォーマンス。

軽快なラッパの音と、それに合わせて愉快に踊る。子供達もつられて楽しく一緒に踊る。

雪の寒さなど吹き飛ばすように子供達は笑い回る。

ピエロがおどける。

子供達が「あーっはははは」と笑う。

ついエリーザも笑つてしまつ。

きっと教会の人の誰かが可哀想なこの子達の為にしている事だらう。そう思つたが、ピエロの化粧が濃いために顔がわからない。そしてラッパは歌を奏でる。

ピエロが歩き出した。

子供達もついて行く。

「え？」

エリーザはテオもその集団について行くのを見た。まあ少し位なら…と、自分も後をついて行く。

ピエロは子供達を従えて、音を鳴らしてついて行く。街中をゾロゾロと練り歩く。

それを見ていた大人たちは愉快とばかりに目を細める。そして子供達は我も我もと同じく輪に加わっていく。いつしか子供の数は膨れ上がり、街中の子供が集まつたようだ。

そろそろいいだらう。いい加減に家に帰らないと…。

そう思つたエリーザはテオに言う。

「そろそろ帰るわよ」

だがテオはニコニコと返事もせずに踊り歩いてついて行く。

「こら、こいつちに来なさい」

エリーザは少し可哀想に思いつつもテオの手を引っ張る。すると強い力で振り払われた。

どこにそんな力があつたのかといふばかりに。

ふと周囲を見ると、いく人かの親が子供を連れ帰そつと必死に子供を縋りついていた。

だが全てを子供達は無視し、そして笑顔でついて行く。

エリーザは何やら恐怖した。

もう一度テオを連れ帰ろうと、無理やりに抱きかかえた。  
ドンー！

力一杯に足で蹴られスルリとテオは抜け出した。  
笑顔のままに。ただニコニコと拒絕した。

目は一点しか見ていない。

ラッパを吹くピエロだけだ。

エリーザは必死でテオの名前を呼ぶ。

けれどテオは聞こえないかのように、ただ歩く。  
そうして行列は進んで行く。

神様、これは罰ですか？

私がこんな仕事をして汚れたからですか？

けれども子供は関係ありません。

助けて下さい。

助けて下さい。

行列が街外れに近づくと周囲の大人は騒ぎ出した。  
けれども結果は同じだ。

どれだけ頑張つても不思議な事に子供達をとめる術はなかつた。  
ピエロはおどける。そして進む。ラッパを吹いて。

ピエロを止めようとした大人が苦悶の顔を浮かべてその場に倒れる。  
辺りは恐怖に染まっていった。

愉快そうな子供達とは対照的に。

このままどこに連れて行かれてしまうのか？

それでもついて行くしかない。

私には、この子だけなのだ。

街外れまで来たエリーザは、ふと暗闇の路地に目をやる。

そういえば薬屋があつた。

そうだ！！

エリーザは必死でそこに飛び込んだ。

そしてドアを叩く。

「開けて下さい！！開けてください！！助けて下さい！！！」

何度も何度もドアを叩く。

するとドアがゆっくりと開き店主が現れた。

無言の店主に必死で訴える。

「助けて下さい！！子供が連れて行かれます！！」

涙ながらに必死で助けを請う。

「幾らでも結構です！！なんでもします！！

あの子は私の一番大事なものなんです！！」

店主はゆっくりと行列を見た。

そしてエリーザの肩を一度ポンと軽く叩き

そして店に引き返した後に、小さな袋を持つて現れた。

縋る気持ちでエリーザはそれを受け取り

急いで行列に追いついた。

行列は街を出る所だつた。

袋の中身は粉だつた。

これを飲ませれば良いのか？

エリーザはテオを探し出し、そして口元に薬を擦り付けた。

けれども笑うだけのテオは、そんな行為など見えないとばかりに舐めもしなかつた。

もつと飲ませなければ…エリーザは必死になつた。

テオをなんとか捕まえて口を開けさせれば

粉を口の中に入れ込む事が出来る。

そう考えたエリーザは、また力づくで捕まえにかかる。

テオは邪魔だとばかりに、視線をピエロに向かたまま母親の体を払いのけた。

ドンと振り払われたエリーザ。

その力の強さゆえに地面に尻餅をつく。

そして見たのは、手にしていた袋の中身が衝撃で飛びテオの体に全て降りかかった姿だった。

「ああっ」

これで薬はもうない。オシマイだ。

エリーザは力なくさめざめと泣き伏した。

だが…

「お母さん、どうしたの？」

いきなり我が子に声をかけられた。

この子の声がこんなにも嬉しいものだったとは。

テオがエリーザの前で不思議そうに母親を見ていた。すかさず抱きしめてエリーザは泣く。

「戻ったのね！！」

「何が？ねえ…」

答える事すら出来ずにエリーザは泣いた。

そうしている間も、行列は進んでいき

そして闇に消えるように姿を消した。

大勢のテオ以外の子供達を連れて。

行列は進む。軽快なラッパの音に合わせて。

子供と共に来た親たちは途中でなぜか息絶えた。

子供達とピエロは進む。

楽しくおどけて愉快な音色で。

聖なる夜を祝うように。

深い森を抜け、そして丘に来る。

大きな岩がそこにあり、大きな亀裂が入っている。

ピエロは楽しく子供に指差す。

さあ、楽しい事が一杯つまつている。

そこに入るんだ。

そう言わんばかりに、自分は入り口に立ち亀裂を指差す。

大人でも疲れる森を抜けた子供達。

汗一つかかずに、楽しみ楽しみとばかりに  
次々とその亀裂に入る。

亀裂の中は真っ暗闇で、子供が一人入ることに  
ヒューッと何かが落下する音がする。

ラッパの音がこだまする。

楽しい祭りと子供達を盛り上げる。

「コニコ」と笑顔で入っていく子供達。  
おどけて笑つて子供達の最後の一人が入った頃に  
トドメとばかりに、ひときわ大きなラッパの音が鳴り響いた。  
そして岩は大きな音をたてて亀裂を消した。

ピエロは気づいていた。

その禍々しい気配に。

全てを完了し、ラッパから口を離し  
その存在を静かに見つめる。

「禍々しいものが、この聖なる夜に何の用だ」  
静かにピエロは告げた。

呼ばれた気配がスッと月明かりに姿を現す。  
知らぬ間に雪はやんではいた。

その男は薬屋だった。

無表情な顔でピエロを見つめる。

ピエロは笑う化粧はそのままに、敵意に満ちた目で薬屋を見つめた。  
そして再び男に告げる。

「邪魔をするのか、汚れた生き物めが」  
やつと薬屋が声を出した。

とてもとても低い声で

「そろそろ材料が必要でな……しかし大した聖なる夜だ」

ピエロがラッパを男にぶつける。

軽く男は飛んできたラッパを手で振り払う。

「聖夜を汚すものは許さない」

怒りが爆発したかのようにピエロはうなる。

そして、ビリビリと音が鳴り、ピエロの背中に羽が生えた。いや…そもそも、それは隠していただけだろう。

純白の聖なる羽。

この日に相応しい羽。

男は驚きもない。

そして自らも羽を出す。

闇に染まる黒い羽。

「たいした天使だ…子供達を犠牲にするとは」

男のつぶやきにピエロだった者が答える。

「これは神の判断だ。あの哀れな子達に祝福を」

そして丘の上で二つの影が重なり、そして激しい勢いで離れる。

天使が飛び、男が掴みかかる。

まるで絵画のような光景だが誰も見ることはない。

聖なる者と闇の者の戦い。

腕を振り上げ天使は力を振るう。

だが男はそれを間一髪でかわし、自らもナイフを突き出す。いつ果てるともない時間が経過する。

そして勝敗は決まった。

首元にナイフを突きつけられた哀れなピエロが横だわっていた。

男は無言でそれを見下ろす。

何のことはない。このピエロはラッパを吹くのに力を使い果たした。肩にそれを担ぎ、そして店に戻る。

街は、これでもかと人が減っていた。

帰る途中でも、沢山の大人の死体が目についた。

そんなものはおかまいなしに男は帰宅した。  
誰も男を見ようとはしなかった。

天使の遺体を担いだ男。

見えなかつたのかも知れない。

まずは服を脱がせ全裸にする。

そして血を抜き別の容器に保管した。  
この血は墮胎・避妊に効果がある。  
残りの体は大きな水槽に放り込み  
そして乾燥させれば万能薬になる。

男は自らの仕事に没頭した。

そろそろ新しい材料が欲しいと思つていたので  
丁度良いタイミングだつた。

男はほくそえむ。

既に以前の材料は残り少なかつたが  
今回の一體で、また少しはもつだらう。  
しかし街の人間が大量に消えた。  
この街での商売はもうダメかも知れない。

男の脳裏にエリー・ザが浮かぶ。

ああ…あの女だ。

俺は呪いで人と言葉を交わすのを禁じられている。  
なのに、あの女は自ら契約を求めてきた。

暗闇の中で怪しく口元を歪ませる。

契約は実行されなくてはいけない。

次の日の朝。

小さな街は大騒動だつた。  
大勢の子供は行方不明。

そしてついて行つた親たちの死体が確認された。

街の継続すら危ぶまれる実態に、街は騒然とした。

なので誰も気づかない。

貧しい家のある女が、突然死んだことに。

「お母さん起きてよ」

テオは必死で母親の体をゆさぶる。

「起きて？ ねえ僕もう勝手なことはしないから」

安らかに笑みさえ浮かべて目をつぶる母にテオはしがみつく。

「起きてよ。お母さん大好き。僕はお母さんが一番好き」

聖なる夜は終わった。

（完）

(後書き)

企画のお題「クリスマス」で作りました。  
やはり不幸にしてしまいます。  
駄文の思いつき作品です。失礼しました。  
この話は晒すので独立させました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6433z/>

---

聖なるラッパ

2011年12月21日18時50分発行